

## 賢治と心平の交友—「発見」から「全集」まで—

群馬県立女子大学 非常勤講師／  
元草野心平記念文学館専門学芸員  
小野 浩

### ■はじめに

ご紹介いただきました小野 浩です。関西宮沢賢治の会の皆様、比叡山延暦寺での賢治命日に講演する機会を与えて頂きありがとうございます。文学館の学芸員時代に宮沢賢治、草野心平、高村光太郎関連の企画展の多くを担当しました。本日は、賢治と心平の交友—「発見」から「(最初の)全集」—まで、大正10年(1921)から昭和10年(1936)の約15年間を中心に、お話しをさせていただきます。配布した資料は「宮沢賢治と草野心平 交流略年譜」、2018年文学館企画展のミニ図録(関係頁)、「草野家系譜」です。参考資料として心平弟・天平の詩碑の資料もあります。どうぞよろしく願いいたします。



### ■心平が果たした賢治への「役割」

最初に、草野心平は、「蛙の詩人」「天の詩人」と呼ばれていますが、私は「賢治発見の詩人」を付け加えたい。心平は賢治に、直に会うことは一度も無く、文通、同人誌、詩誌、友人からの話だけの交友でしたが、「賢治のポエジー」を、日本詩人の中で誰よりも早く受け止め、「賢治発見の詩人」として「賢治作品の初期の読者、共感者、研究者、発信者」という役割を生涯、担いました。そして、賢治没後の心平の行動こそが、宮沢賢治を「岩手の詩人・童話作家」から、「世界の賢治」に変えたと言っても過言ではないからです。

### ■賢治と心平の意外な接点…高知尾智耀

大正10年(1921)、賢治25歳、心平18歳。賢治は1月23日に家出上京をし、心平も同月神戸から中国広東に出航します。二人とも新天地を求めての行動で人生の大きな分岐点でした。賢治は日蓮宗「国柱会」の理事・講師の高知尾智耀(たかちお・ちよう)から「法華文学」の創作を進められ、賢治は童話を始めました。

智耀の本名は誠吉、心平が学んだ旧制磐城中学校(現在の福島県立磐城高校)で明治39年(1906)～大正3年(1914)の8年間、英語と修身を教えていました。大正3年には同校で田中智学の講演会「日本国体と日蓮主義」をしています。心平は大正5年入学なので、智耀にも智学にも会っていません。賢治に影響を与えた「高知尾と心平のすれ違い」があったのです。

### ■草野家の複雑さと家族との別れ

心平には、祖父が2人います。実祖父が白井遠平(炭鉱経営、衆議院議員)、養祖父が草野高蔵(村長、県会議員)。何故でしょうか? 実は、高蔵の妹と白井遠平の間にできた子どもを、実子がいなかった高蔵が養子にしたからです。馨(かおる〈心平の父親〉)と名付けられました。馨はトメヨと結婚し、5人の子供(姉・綾子、兄・民平、二男・心平、妹・京子、弟・天平)に恵まれます。心平は、三男二女の三番目に生まれた二

男になります。

賢治も5人（賢治、長女・トシ、二女・シゲ、二男・清六、三女クニ）、二男三女の長男です。

大正11年（1922）11月、トシ（享年24歳）の死は、賢治（当時26歳）にとっても家族にとっても大きな悲しみと別れでした。ところで皆さんは「銀河鉄道の父」の映画は観ましたか？ 妹トシの葬式の場面は鬼気迫るものがありました。心平の場合、大正5年（1916）、心平が小川尋常高等小学校から磐城中学校に進学した年、家族との別れ、それも3回、ありました。1月に兄・民平（享年17歳）が結核性脊髄カリエスで、2月に母トメヨ（享年46歳）が肺結核で、8月に姉・綾子（享年22歳）が腸チフスで亡くなったのです。

先ほど導師・横山照泰師が生と死についてお話しされましたが、12歳の心平はこの時に悲しみではなく「人の死とは何だろう」「死に対して恐れ」を抱いたのです。私はそれが、それからの心平の生涯と作品の根底に漂っているように感じています。

### ■心平の学校生活

心平の学校生活は長くは続きませんでした。磐城中学校を4年中退、慶応義塾普通部（現在の慶応高校）に編入しますが、そこもやめてしまいます。大正10年、中国広東省の嶺南大学（現在の中山大学）に留学、大学はアメリカ人経営のミッションスクール、専攻は文学ではなく経済学だったようです。ようやく自分の居場所を見つけ青春を謳歌しましたが、大正14年7月、排日英運動の激化により大学でも排外人運動が起こり、卒業直前でやむなく帰国の途につきました。実はここでの4年間（英語の授業、日常会話は中国語、大きすぎる自然）が、昭和3年（1928）12月、心平の第一詩集『第百階級』（銅鑼社）100冊（蛙の詩）を生み出したのです。

### ■海を越えた1冊の『心象スケッチ 春と修羅』

核心に入ります。大正13年（1924）、賢治は28歳、心平は21歳。4月、賢治は第一詩集『心象スケッチ 春と修羅』（1000冊）を刊行しました。8月、その中の1冊が、当時、日比谷図書館に勤めていた旧制磐城中学校の後輩・赤津（後に佐々木）周雄（かねお）から、嶺南大学の心平に送られたのです。「作品との出会い」です。

賢治没後、心平は「南支那広東の頃から何度彼の詩集を読んだことだったろうかとむしろ少しあきれ、何度読んでも新鮮だったのは彼の詩集だけであった」（『日本詩壇』昭和8年12月）と言い、更に後年、「こちらの方が『槐多の歌える』より手ごわかった。第一矢鱈にとびだすテクニカルタームである。そんな科学的用語などわかろうはずはない。けれどもわからないながらわかった気がした。（中略）彼の観念や生活の中で生きていた日常語にすぎなかったから、そしてそれがまた変にエキゾチックな魅力を持っていた。象眼細工ではなかった。もしそうだったら私は賢治に近づかなかったかもしれない」（『わが青春の記』昭和40年）と賢治と自分の接点を記しています。賢治作品の初期の読者の言葉です。

それから、賢治の詩集を心平に送った周雄の誌眼と橋渡しは忘れてはならないことと思います。

### ■賢治からの返事、同人詩誌「銅鑼」同人に

大正14年（1925）7月、中国から帰国した心平は、千代田区飯田橋の黄瀛（こう・えい）の下宿に転がり込みます。黄瀛は心平の詩友であり「銅鑼」立ち上げの同志です。また、その頃、黄瀛は高村光太郎の彫塑のモデルをしていたので、心平を紹介し、後に賢治にも会いに行っています。まさに心平・光太郎・賢治を繋いだキーパーソンです。心平と黄瀛は連名で賢治に「銅鑼」の同人への勧誘の手紙を出しました。

賢治から「私は詩人としては自信がありませんが、一個のサイエンティストとしては認めていただきたい」と思います」の、あの有名な返事が送られてきたのです。「賢治と心平の文通」が始まりました。

賢治の詩が載った第4号には「現詩壇で最も奇抜な二つの個性―三好十郎、宮沢賢治両君が同人に加わった」と「賢治発信」が始まりました。賢治の詩は「銅鑼」に9回掲載されます。

### ■賢治へ電報、同人詩誌「銅鑼」と心平

心平にとって「銅鑼」は何だったかのでしょうか？私は心平自身の「生きている証」のように思えます。昭和3年(1928)6月に終刊となる16号までの約4年間と更に1年間は、貧乏のどん底で、借金と引越しの繰り返し、心平自身、「生活ではなく生存だった」と言っています。昭和4年6月ようやく上毛新聞社(校正係)に職を得ることができるまで。

この頃のエピソードを一つ。昭和3年9月、賢治が病臥中とも知らずに、群馬県前橋市の長屋に住む心平は「コメーピョウタノム」の電報を打ちました。賢治にたいする知識は「アメリカ式の大農場を経営し、念仏をととなえ、ベートーヴェンをきき、詩をつくら」といったふしぎな人物」という程度でした。賢治はなるべく金になりそうな造園学の本を送り、心平は換金して生活の足しにしたのは間違いないことでしょう。



左：草野心平 右：宮沢賢治 資料

### ■心平「賢治を大いに発信」

「銅鑼」以外の詩誌にも、賢治の発信を精力的に心平は行いました。「現在の日本詩壇に天才がいるとしたら、私は名誉ある『天才』は宮沢賢治だと言いたい。世界の一流詩人と伍しても彼は断然異常な光を放っている。」「今は只、世間では殆んど無名に近い一人のすばらしい詩人の存在を大声で叫びたいのである」(『詩神』1926年(大正15年)8月)。それ以外にも叫んでいます。

そして、ここが一番のポイントだと思います。心平は賢治研究の先駆けとなる「宮沢賢治論★―読者ノート―」(『詩神』(1931年(昭和6年)7月号)を發表したのです。「彼は植物や鉱物や農場や虫や音楽や動物や人物や海や万象を移動カメラに依って眼いっぱい展開させる。光と音への異常な感受性によって適確に自然を一巻に凝縮した東北以北の純粹トーキー」「彼は彼の心象に映る風景の一点であり、同時に作品の中の彼も客観的一点であるに過ぎない。主観と客観は相共に融合し彼の全作品にまんべんなくにじんではいる。スケールの大がここからくる」と賢治の心象スケッチを掴み取って、激賞しました。「読者、共感者、研究者、発信者」の心平がそこにいました。

しかし、賢治は、心平の「賢治作品の解説と評価」に少し違和感を持っていたようです。心平宛書簡下書きには「世界的だなどということは本当に数ヶ国語にでも訳されてからいべきであって」と記されていました。

### ■心平「幻の花巻行」

心平は「生前一度なりと、雷管を腹に蔵し、しかもしづかに笑っていた生きた肉体に会いたかった」と賢治没後、出会えなかったことを悔やんでいました。出会えたチャンスはあったのです。



まず、「賢治と心平のすれ違い」です。大正15年(1926)12月3日～年末、賢治は上野の帝国図書館(現在、国立国会図書館・国際子ども図書館)やタイピスト学校で勉強、オルガンやセロ、エスペラント語を習う1ヵ月がありました。高村光太郎を訪問したと云われていますが、丁度そのころ、心平は貧困による栄養失調から急性肺炎にかかり小石川東大病院分院に二週間入院していました(その後、大森の両親の家)。もし、そうでなかったら、光太郎のアトリエで出会えたかもしれません。



賢治91回忌記念講演風景(延暦寺会館2階研修室)

そして、昭和2年(1927)1月、今度は、心平が花巻に向かおうとしました。父とのいざこざから両親の家を飛び出した心平は「宮沢農場」で働かせてもらおうと思ったからです。しかし、赤羽駅から青森駅行の汽車ではなく、郡山駅経由新潟行に乗ってしまいました。何故でしょうか? 先に来た汽車に乗ってしまったと心平は言っていますが、私は別な理由があったと思っていますが、皆さんはどう思われますか?

### ■賢治の死、『宮沢賢治追悼』刊行

賢治が亡くなる前、二人の関係が少しギクシャクします。昭和6年11月、心平は詩誌「弩(いしゆみ)」の創刊にあたり賢治から文語詩が送られ、心平は別稿を求めましたが賢治は応じませんでした。また、同8年(1933)7月頃、心平は新たな詩誌「次郎」を企画、賢治にも参画を要請しますが、「高村氏草野氏等同人雑誌を作るとの事私例によって遁げました(母木光宛書簡)から断ったことが分かります。私は、心平の強引きと賢治の慎重さ、そして優先するものの違いがあったからだと思います。

9月21日、賢治(享年37歳)は亡くなります。光太郎から旅費を借りて心平(30歳)は、27日宮沢家へ弔問に訪れ、整理された膨大な未発表の原稿に驚きます。後に「そこには『ゴッホの弟』がいた。私如きふしだらが散逸などということは、天が口を封じる程の賢治熱愛の家庭があった。(『詩と詩人』昭和29年)」と心平は振り返っています。



2023年度賢治忌記念講演会聴講風景

賢治作品の存在を世間に知らせるために、「昭和9年1月、心平は、『宮沢賢治追悼』(次郎社)を編集・刊行します。賢治の遺稿「龍と詩人」、弟・清六「思い出」、心平作成「賢治作品目録」、そして心平の呼びかけにより詩人高村光太郎「コスモスの所持者宮沢賢治」など31名の追悼文が掲載されました。岩手の詩人・童話作家から「日本の詩人・童話作家」に押し上げるスタートとなった1冊だと思います。

### ■『宮沢賢治追』から「全集発刊」に

しかし、地方の無名詩人の全集づくりは進みませんでした。ようやく、心平の知り合いの文圃堂書店・野々上慶一が引き受けてくれます。その経緯を野々上氏の「最初の賢治全集と心平さん」(宮沢賢治展 図録1999 草野心平記念文学館)から紹介します。「心平は、賢

治のことを熱っぽく語り、私はその熱意に感じ入り、ほだされた格好で、まったく無名の宮沢賢治のモノ、それも全集（といっても三冊）を出すことになった」のです。心平は光太郎、宮沢清六・横山利一と共同責任編集者となり、編集のほとんどに関わりました。そして、最初の選集的全集3巻、「童話篇」「詩篇1」「詩篇2」が昭和9年（1934）10月から翌10年9月に発刊されます。3巻とも1000部印刷し、童話篇は200部増刷されました。

心平の賢治発見「作品との出会い」大正13年（1924）から10年目、賢治作品の日本全国発信、いや世界発信の大きな一歩が始まりました。以後、心平が望んでいた「世界の賢治」になっていったのです。

### ■最後に

賢治と心平の交友—「発見」から「全集」まで—を、資料解説とエピソードを加えてお話しをさせていただきます。心平は、賢治に、直に会うことは一度も無く、文通、同人誌、詩誌、友人からの話だけの交友でしたが、「賢治のポエジー」を、日本詩人の中で誰よりも早く受け止めました。「賢治発見の詩人」として「賢治作品の初期の読者、共感者、研究者、発信者」という役割を担ったことについて、関心を持っていただけたら嬉しいです。ご清聴ありがとうございました。

### <質疑応答>

#### ①心平と賢治は、何故、会うこともなく長く続く交友関係にあったのか？

一言で言えば、心平が最初に手にした『春と修羅』からの牽引力が長く続いたこと、言葉は変ですけど、心平が「賢治作品に惚れ込んだ」状態だったと思ってください。どうしても、詩の仲間になりたい。評論家の期待感と表現者の共感が入り混じった心平の気持ちだったと思います。生前交友と没後交友、ともに心平は繋がりをもった。むしろ、没後の方が正面から向き合えたと考えられます。

#### ②心平と賢治に信仰や宗教についてやりとりはあったのか？

文学上のやりとりはありましたが、宗教や信仰そのものでは見当たりません。ただ、二人の死別の様子から…、二人の生と死の向き合いの違いが見えるような気がします。賢治は家族に囲まれて、また、遺言で「国訳妙法蓮華経」を遺しますが、心平は、詩「婆さん蛙ミミのご挨拶」を記しています。「地球様。／永いことお世話様でした。／さようならで御座います。／ありがとう御座いました。／さようならで御座います。／さようなら。」と、地球、いや動物・植物、鉱物、すべてものに、別れの挨拶をしたい、心平の意思がこの詩に込められていたように思います。

#### ③昭和8年と昭和10年の心平の追悼講演の内容を知りたい。

昭和8年11月23日の花巻町役場講堂での追悼講演会は「賢治を想う」、昭和10年9月の明治神宮外苑日本青年館では「宮沢賢治について」が演題です。内容は残念ながら手元に資料がありません。

#### ④昭和45年に心平の著作で『わが賢治』があるが、今回の講演で関連するところは？



講演司会 会長 深田 稔



関西宮沢賢治の会 59回 (賢治91回忌) 法要 (AM 11:15より 比叡山延暦寺1階 瑞宝の間)

心平が賢治の作品とエピソードについて、リアルタイムで書いたものと後年に回顧したものとをまとめて編集・出版したのが『わが賢治』昭和45年9月二玄社です。今回の講演でもこの本を参考にしています。ただし、勤務していた文学館では原資料にあたれたことと比較資料から、そうではないところもあったかもしれません。

「本稿は2023年9月21日 PM1:00、比叡山延暦寺での賢治91回忌記念講演の内容に、加筆・修正を加えたもので、2023年12月13日発行の関西岩手県人会報・イーハトーブ53号特別寄稿です」

## 添付資料

注) 詳しい資料は2種類ありましたが、「(交流略年譜) 以外は(著作権)の問題があり、本講演録への添付は見合わせたい(講師)」とのことで割愛しました。

### ■宮沢賢治と□草野心平 交流略年譜 大正10(1921)～昭和10(1936) 小野 浩 2023・9・21

大正10年(1921) 25歳(賢治) 18歳(心平)

1月23日、[家出上京](#)。[田中智学](#)の日蓮宗・国柱会の活動に加わる。この時、同会理事・[高知尾智耀](#)から「法華文学」の創作を勧められ童話を書き始める。➡本名誠吉、旧制磐城中学校教師(英語・修身)・明治39年～大正3年在職。心平は同中学校に大正5年入学、同8年退学。※心平の学歴

1月、(心平) [神戸を出航](#)、2月、上海経由で広東(現・広州)着。

4月、上京した父を迎え、共に6日間の関西旅行。伊勢神宮、比叡山・叡福寺

8月中旬～9月初旬 妹トシ病気の報に、花巻へ帰る。トランク

9月、(心平) 嶺南大学ゼネラル・アーツ・サブフレッシュマンに入学する。



9月、トシ、病気のため教職を辞す。  
 10月、花巻高等女学校教諭藤原嘉藤治と知り合う。  
 12月、稗貫郡立稗貫農学校(後の花巻農学校)教諭になる。  
 12月、童話「雪渡り《一》」を発表「愛国婦人」12月号。

大正11年(1922) 26歳

2月、「精神歌」作詞。(3月、川村悟郎に作曲を依頼。)  
 9月、生徒5、6人と岩手山登山。同月、劇「飢餓陣営」を上演。  
 9月、(心平) 嶺南大学ゼネラル・アーツ・フレッシュマンに進級する。  
 11月27日、療養中の妹トシ死亡。享年24歳。※賢治の家族

大正12年(1923) 27歳

4月～5月、岩手毎日新聞に童話「やまなし」「氷河鼠の毛皮」「シグナルとシグナレス」を発表。  
 5月、劇「植物医師」「飢餓陣営(略称バナナン大将)」を上演。  
 7月31日～8月12日 教え子の就職依頼のため樺太に旅行。→トシとの交信を求める傷心旅行  
 7月、(心平) この頃、アルバイトで働いていた平の友柴田書店で『槐多の歌へる』を読んで、その独自のスタイルに感動する。  
 7月、(心平) 亡兄民平と合本詩集『廃園の喇叭』を刊行する。  
 8月、(心平) 広東に帰る途次、父継母妹弟(馨・なお・京子・天平)が住んでいた京都市相国寺東門前町に寄る。※心平の家族→草野家系譜→天平と比叡山  
 9月、(心平) 嶺南大学ゼネラル・アーツ・ジュニアに進級する。

大正13年(1924) 28歳

4月20日、心象スケッチ『春と修羅』一千部を自費出版。「春と修羅」「無声慟哭」など13章69篇。  
 5月18日～23日、白藤慈秀と生徒を引率して北海道修学旅行、帰着後「修学旅行復命書」を提出。  
 8月10日～11日、農学校で生徒らと「飢餓陣営」「植物医師」「ポランの広場」「種山ヶ原の夜」を上演、一般公開。  
 ★8月、(心平) 広州に帰ってのち磐中時代の後輩佐々木(旧姓赤津)周雄(当時日比谷図書館勤務)から宮沢賢治の『春と修羅』が送られてくる。一読瞠目する。賢治没後、心平は「南支那広東の頃から何度彼の詩集を読んだことだつたらうかとむしろ少しあきれ。何度読んでも新鮮だつたのは彼の詩集だけであつた」(「日本詩壇」昭和8年12月)、さらに後年「こちらの方が『槐多の歌へる』より手ごわかつた。第一矢鱈にとびだすテクニカルタームである。そんな科学的用語などはわかるはずはない。けれどもわからないながらわかつた気がした。(中略)彼の観念や生活の中に生きていた日常語にすぎなかつたから、そしてそれがまた変にエキゾチックな魅力を持つていた。象眼細工ではなかつた。もしそうだつたら私は賢治に近づかなかつたかもしれない。」(『わが青春の記』昭和40年6月)と賢治と自分との接点を記した。  
 9月、(心平) 嶺南大学ゼネラル・アーツ・シニア(最終課程)に進級。大学内に新設された「日本語講座」の担任講師となる。  
 12月1日、イーハトヴ童話『注文の多い料理店』刊行。「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」など9篇。  
 ★12月、佐藤惣之助が『春と修羅』を、「日本詩人」(12月号)誌上で激賞。

大正14年(1925) 29歳

4月、(心平) 同人詩誌『銅鑼』創刊。  
 ★7月、(心平) 上海を拠点に起こった排日英運動は中国各地で暴動化(五・三〇事件)。6月23日には広州沙基事件。嶺南大学内でも排外人運動が起こり、卒業をまたずにやむなく帰国。①黄瀛(麴町区飯田町二一五三・曾方)(現千代田区飯田橋)のもとに寄寓する。ここで広州から持ち帰った『銅鑼』3号の発送をし、宮沢賢治に同人勧誘の手紙を出す。賢治から「私は詩人としては自信がありませんが、一個のサイエンティストとしては認めていただきたいと思います。」といった返事と共に一円の小為替と詩二篇が送られてきた。  
 ★8月、(心平) 「黄瀛の首」のモデルをしていた黄瀛に連れられて、駒込林町のアトリエに高村光太郎を訪ねる。賢治について熱く語る。  
 9月、(心平) 帰国後はじめて②祖母だけの住んでいた郷里(いわき市小川町)に帰省...  
 ①9月8日、「銅鑼」4号に「心象スケッチ 負景二篇」として「一命令」「未来圏からの影」を発表。編

集後記に心平は①「現詩壇で最も奇抜な2つの個性一三好十郎、宮沢賢次(治) 両君が同人に加はった。」と書く。同号の印刷は小川尋常高等小学校の謄写版。

10月下旬、大演習後の清六を見舞い、仙台の写真館で記念撮影。

10月、(心平) 上京。③牛込区下戸塚五二六(現新宿区戸山)の「近衛館」に下宿...

②10月27日、「銅鑼」5号に「心象スケッチ 農事三篇」として「休息」「丘陵地」を発表。

11月23日、東北大・早坂一郎助教授を案内、イギリス海岸でバタグルミ化石採集。

12月20日、岩波茂雄あての書簡で、『春と修羅』(80銭として)と岩波出版の哲学・心理学書との交換を申込む。定価2円40銭。

大正15年・昭和元年(1926) 30歳

③1月1日、「銅鑼」6号に「心象スケッチ」として「昇幕銀盤」「秋と負債」を発表。

②(心平) 後記に心平は、『春と修羅』は佐藤惣之助の激賞以外、一つの批評さえ見得なかった「類例のない不思議な驚異です」と書く。

1月、「月曜」創刊号に「オッベルと象」2月号に「ざしき童子のはなし」を発表。

1月～3月 岩手国民高等学校で「農民芸術論」を十一回講義。

3月31日、花巻農学校を依願退職。4年にわたる教員生活が終わる。

4月1日、花巻郊外・下根子の宮沢家別宅で独居生活をはじめ。開墾地は北上川の岸・砂畑2反4畝(約2400㎡)

6月頃、「農民芸術概論綱要」を書く。羅須地人協会設立もこの頃か。

④8月1日、「銅鑼」7号に「心象スケッチ二篇」として「風と反感」「ジャズ」夏のはなしです」を発表。

8月、(心平)「詩神」8月号に評論「三人」を発表。

③「現在の日本詩壇に天才がゐるとしたら、私はその名誉ある『天才』は宮沢賢治だと言ひたい。世界の一流詩人に伍しても彼は断然異常な光りを放つてゐる。」「私は今は只、世間では殆んど無名に近い一人のすばらしい詩人の存在を大声で叫びたいのである。」と激賞する。

⑤10月1日〔推定〕、「銅鑼」8号に「ワルツ第CZ號列車」を発表。

⑥12月1日、「銅鑼」9月号に「永訣の朝」を発表。編集後記に『春と修羅』を特別割引し一円五拾銭で取り次ぐ」とある。

■12月3日、上京、上野の帝国図書館やタイピスト学校で勉強、オルガンやセロ、エスペラント語を習う。高村光太郎を訪問。心平とは会えなかった。年末に帰郷。

12月、(心平) 貧困による栄養失調から急性肺炎にかかり、小石川東大分院に二週間入院。④大森八景坂(現大田区・大森駅山王口前の池上通りの坂道)の両親の家に一時同居。

昭和2年(1927) 31歳(賢治) 24歳(心平)

■1月、(心平) 父と争い大森の両親の家を出奔、「宮沢農場」(心平が想像していた羅須地人協会)で働かせてもらつつもりだったが、たまたま赤羽駅に入ってきた東北本線郡山廻り新潟行きに乗車、新潟で詩誌「新年」の同人寒河江真之助を訪ねる。結果的に生涯、賢治と会う機会を失う。

⑦2月21日、「銅鑼」10号に「冬と銀河ステーション」を発表。

5月末頃、花巻温泉南斜花壇に花の苗を植える。

6月、(心平) 百姓たらんとして下戸塚の「近衛館」の下宿を引き払い、⑤郷里に帰る...

⑧9月1日、「銅鑼」12号に「イーハトーブの氷霧」を発表。

11月、(心平) 結局百姓を断念。上京して⑥大森八景坂二三一九の両親のもとに寄宿。報知新聞の臨時入社試験を受けたが不採用。自動車教習所に通ったが途中で断念。

12月26日～31日 新潟カフェ・ロウランサンで詩誌「新年」主催「代表詩人作品・詩誌・詩集展」に心平の自筆原稿と「銅鑼」が、「さらに賢治の『春と修羅』・自筆原稿が出品される。提供は心平か。」※「新校本・年譜363頁」

昭和3年(1928) 32歳

⑨2月1日、「銅鑼」13号に「氷質のジョウ談」を発表。

3月15日、本日より一週間、石鳥谷で肥料相談に応じる。

5月、(心平) 再び新潟へ行く。⑦寒河江真之助の経営する「カフェ・ロウランサン」(新潟)の居候となる...

6月1日、「銅鑼」16号発行。「草野心平君、当分住所不定、郵便物一切は東京市外原宿170神谷気付」編



集後記（寺田＝土方定一の筆名）。この号を以て終刊。

6月4日、(心平) 江島なおの養女やま(20歳)と結婚。新居は八景坂の両親の家のすぐ近く、⑧馬込(現大田区)の煙突掃除屋の安普請の二階に居を構えた。

6月、大島に伊藤七雄・チエ兄妹を訪問。

8月10日、発熱病臥、両側肺浸潤と診断される。40日間熱と汗に苦しむ。いったん回復するが、12月に急性肺炎を再発。長期の病臥となる。

8月、(心平) ⑨麻布天現寺(現港区麻布)の下宿「福生館」に移り住む。

■9月、(心平) 横地正次郎・坂本七郎のすすめで⑩群馬県前橋市神明町六九の二軒棟割の長屋に転居。病臥中とも知らず賢治宛に「コメーピョウタノム」の電報を打つ。当時、心平は貧乏のどん底の上、賢治にたいする知識は「アメリカ式の大農場を経営し、念仏をととなえ、ベートーヴェンをきき、詩をつくるといったふしぎな人物」という程度だった。賢治はなるべく金になりそうな造園学の本を送る。

11月、(心平) 第一活版詩集『第百階級』(銅鑼社)を刊行。

昭和4年(1929) 33歳

6月、黄瀛来訪。陸軍士官学校の卒業旅行で花巻温泉から。

6月、(心平) 上毛新聞社校正部に入社。この頃、⑪前橋市紅雲町五六に転居。

④7月、(心平) 「詩神」7月号にアフォリズム「ささやかな断片」を発表。そのなかの「エポック」で「我々の尊敬する詩人宮沢賢治」「詩集『春と修羅』を読まないことは損失ぢやないか」と言及。

昭和5年(1930) 34歳

⑤2月、(心平) 「文芸月刊」2月号のアンケート「活躍を期待する新人は誰か？」に「宮沢賢治の詩集『春と修羅』は日本詩の驚異、世界の傑作です」と答える。

4月12日、東北砕石工場主・鈴木東蔵来訪。石灰石粉による土壌改良の話で意気投合する。

春、やや回復、園芸を始める。

■11月、(心平) 上毛新聞社を退社。⑫祖母トメ(嘉永3年～昭和14年、当時80歳)だけのいる郷里の生家に引き上げる。農耕に従事しようと宮沢賢治に相談すると、詳細な農へのアドバイスの返事をももらったが、小作人からの田畑の回収がつかず断念。

「私が福島のとやで土いぢりをやるといふやうなことを言つておくと、まるで電報のやうな速さで、肥料の設計なら自信があるから直ぐにも飛んで行つて授けるといふ意味の手紙を寄越してくれた。」「宮沢賢治覚書」『文学界』3月号 昭和10年3月。

昭和6年(1931) 35歳

1月、「海岸線1」に三野混沌が「描写上の問題と労働せる作家や詩人」宮沢賢治の『春と修羅』と羅須地人協会についてふれている。

2月、東北砕石工場技師(嘱託)となる。「石灰石粉(後に炭酸石灰)」製品の分析・改善、広告文、照会の回答、石灰見本を持っての営業活動に奔走。

2月、(心平) 父馨からの電報で出京。父母のいざこざの仲介のため。⑬芝桜川町(現港区)の両親の家に落ち着いたが、十日ばかりで両親と衝突。同居していた弟天平・義弟(妻やまの弟)俊吉・寛(義母なお・妻やまの異母弟)の三人も引き連れて家出。行くあてのないまま⑭東京市外渋谷町金王(現渋谷区)の小野十三郎の借家に家族六人居候をきめこむ。一週間ほどのち⑮東京府下上目黒二一四三(現目黒区)に転居。

5月、(心平) 牛込新小川町に櫛田民蔵を訪ね五円を借り、佐藤春夫から一円の小為替をもらって中古の屋台を買い、高村光太郎から椅子代わりにリンゴ箱の空箱をもらって、麻布十番の安田銀行前に屋台の焼鳥屋「いわき」を開店。

7月20日、児童文学に「北守將軍と三人兄弟の医者」発表。

⑥7月、(心平) 「詩神」7月号に「宮沢賢治論★一読者のノート」を発表。「彼は植物や鉱物や農場や虫や鳥や音楽や動物や人物や海や万象を移動カメラに依つて眼いつばいに展開させる。光と音への異常な感受性によって確適に自然を一巻にギョウ縮した東北以北の純粹トーキー」「彼は彼の心象に映る風景の一点であり、同時に作品の中の彼も客観的の一点であるに過ぎない。主観と客観は相共に融合し彼の全作品にまんべんなくにじんである。スケールの大がここからくる。」と賢治の心象スケッチを掴み取り評した。賢治在世中における本格的な賢治論。

8月、心平あて書簡下書きに「世界的だなどといふことはほんたうに数ヶ国語にでも訳されてから云ふべきであって」とある。

8月、(心平)「詩神」8月号に「銅鑼」を發表。銅鑼の思い出のなかで、黄瀛と連名で賢治を同人に勧誘したことと「詩人かどうか分からないが一個のサイエンティストとしてだけは認めてください」の賢治からの手紙について触れている。

9月20日、(心平)『明日は天気だ』を刊行。

9月21日、東北砕石工場の出張で、壁材料見本をつめた40kgのトランクを持って上京の晩、八幡館で高熱を発し倒れ、死を覚悟した賢治は遺書を書く。(花巻の父政次郎に電話。小林家の手配により28日花巻に戻る。)

10月、(心平) 昼逃げをして、⑩東京府豊多摩郡淀橋町大字角管315(現新宿区)の通称十二社に転居。屋台の焼鳥屋「いわき」も新宿紀伊国屋の裏、市電の角管終点近くに移す。高村光太郎夫妻、櫛田民蔵が顔を見せたりした。

■10月、屋台の焼鳥屋「いわき」を開業していた心平に電気ブドウ酒の製法を詳しく書き送る。「隣人は或いは五銭で、つかれた筋肉や神経を癒やすでせうか。それは工夫のしやうで、もつと有効にもつとやすすくないでせうか。よき電気ブドウ酒ありとせば、私こそ上手に合成いたし得るです。黒豆の煮汁と酒石酸及び枸橼酸、砂糖及び蜂蜜の適量、葡萄エステル、右の混分物はほんものの葡萄酒と同じく疲労を去り、栄養を加へるでせう」「宮沢賢治覚書」『文学界』3月号昭和10年3月。

11月3日、手帳に「雨ニモマケズ」を記す。同手帳67～70頁。

この年、不況、岩手県は冷害豪雨のため凶作。

★11月、(心平) 詩誌「弩」の創刊にあたり賢治から文語詩が送られてきたが、心平の意に添わず別稿を求めたが賢治はそれには応じなかった。

昭和7年(1932) 36歳

3月10日、「児童文学」第二冊に「グスコブドリの伝記」を發表。同誌に心平は「風船はあがりたくありません」を發表。

5月、(心平) 焼鳥屋「いわき」閉店。宮島資夫人麗子の紹介で実業之世界社(芝区仏教真宗会館、社長野依秀市)に入社。高橋亀吉監修「財政経済二十五年史」(全八巻)の編集校正を担当。

★10月、心平あて書簡下書きで、主義の違いを書いている。同文を文語体に直し、心平訳の『サッコとヴァンゼッチの手紙抄』への返礼(2円為替)と、最後に「次の著作に予約せん」と付記され投函された。

12月、(心平が編集をしていた)『財政二十五年誌』第8巻実業之世界社より刊行。

昭和8年(1933) 37歳(賢治) 30歳(心平)

★7月頃、(心平)「銅鑼」「学校」「弩」に続く詩誌「次郎」を企画し、賢治にも参画を要請。賢治は「『不定同人』といふものにも御任命下さる訳にはいかんですか。」と書き送り、心平は参画許諾と受取る。一方、賢治は母木光宛書簡には「高村氏草野氏等同人雑誌を作るとの事私例によって遁げました」とある。

8月、「文語詩稿 五十篇」「文語詩稿 一百篇」を清書。

9月20日、半紙に墨で短歌を書きつける。「絶筆二首」。

9月21日、容態急変、喀血。法華經一千部を知己に配布してほしいと遺言して、午後1時半死亡。法名 真金院三不日賢善男子。享年37歳。

★9月27日、(心平) 初七日に高村光太郎の工面してくれた旅費で宮沢家へ弔問に行く。この時、膨大な量の賢治の未発表の作品を見る。

10月21日、宮沢賢治追悼講演会用小冊子「宮沢賢治全集抜粋 鏡をつるし」[A]を賢治の弟清六が編集發行。

11月23日、(心平)「宮沢賢治追悼講演会」が花巻町役場講堂で開催され、東京から吉田一穂と同行。仙台から尾形亀之助も参加。演題「賢治を想う」を講演。

昭和9年(1934) 没後1年 心平31歳

1月18日、(心平)「宮沢賢治追悼」(次郎社)を編纂刊行。

2月16日、新宿帝都座地階モナミで、「第一回宮沢賢治友の会」が開催。高村光太郎・尾崎喜八・永瀬清子・菊地武雄・逸見猶吉らが出席。清六が持参した兄のトランクから「雨ニモマケズ」が記された手帳が見つかる。

5月、(心平)「財政経済二十五年史」完結後、やはり実業之世界社から発行されていた「帝都日日新聞」の編集部に移る。

6月、賢治遺言による法華経として「[国訳妙法蓮華経](#)」1千部、清六氏により発行。

8月、(心平) [文圃堂書店](#)の野々上慶一によって全三巻の選集的「[宮沢賢治全集](#)」が発行されることになり、高村光太郎・宮沢清六・[横光利一](#)と共同責任編纂者となる。作品の選定は心平、装幀は高村光太郎。

10月、「[宮沢賢治全集](#)」第一回配本・第三巻『[童話篇](#)』刊行。

昭和10年(1935) 没後2年 心平32歳

3月、「文学界」に「[宮沢賢治覚書](#) (一)」を、10月にその(二)を発表。

5月、(心平)詩誌「[歷程](#)」を逸見猶吉らと創刊。創刊。同人は岡崎清一郎・尾形亀之助・高橋新吉・中原中也・菱山修三・土方定一・逸見猶吉・心平の八人。賢治は物故同人のかたちで遺稿を掲載。発行所は、歷程社。

7月、「[宮沢賢治全集](#)」(文圃堂)第二回配本・第一巻『[詩篇](#) (一)』刊行。

9月、「[宮沢賢治全集](#)」(文圃堂)第三回配本・第二巻『[詩篇](#) (二)』刊行。

9月、(心平)「[宮沢賢治全集](#)」全三巻の完結を記念して東京宮沢賢治友の会主催で「[宮沢賢治三回忌追悼会](#)」を明治神宮外苑日本青年館で開催。心平は「[宮沢賢治について](#)」を講演。

昭和14年(1939) 没後6年 心平36歳

11月、「[宮沢賢治全集](#)」([十字屋書店](#))全七巻 共同編集

昭和23年(1948) 没後15年 心平45歳

10月、創元選書「[宮沢賢治詩集](#)」(創元社)を編纂刊行

昭和26年(1951) 没後18年 心平48歳

2月、創元選書「[続宮沢賢治詩集](#)」(創元社)を編纂刊行

12月、[評論](#)「[宮沢賢治覚書](#)」(創元社)を刊行

昭和31年(1956) 没後23年 心平53歳

4月、[筑摩書房](#)から『[宮沢賢治全集](#)』全十一巻の刊行始まる。

昭和42年(1967) 没後34年 心平64歳

8月、[筑摩書房](#)から二度目の『[宮沢賢治全集](#)』全十二巻の配本始まる。増補改訂版。

昭和45年(1970) 没後37年 心平67歳

9月、[評論](#)「[わが賢治](#)」(二玄社)を刊行

昭和63年(1988) 没後55年

11月12日、心平、急性心不全にて死去。享年85歳。

#### ■参考資料

『[草野心平 常設展示図録](#)』いわき市立草野心平記念文学館 1998年

『[宮沢賢治展 賢治と心平](#)』いわき市立草野心平記念文学館 1999年

『[宮沢賢治イーハトーブ学事典](#)』弘文堂 2010年

「[賢治研究の先駆者①草野心平展](#)」[宮沢賢治イーハトーブ館](#) 2001年

『[新校本宮沢賢治全集](#)』第十六巻(下)補遺・資料 年譜 [筑摩書房](#) 2001年

「[宮沢賢治展 賢治の宇宙 心平の天](#)」いわき市立草野心平記念文学館 2018年、

『[賢治学](#)』第6輯(岩手大学 [宮沢賢治いわて学センター](#)編 2019年